

モニター意見

「無題」

匿名

私は、今回第21巻1号の特集「自然災害に対する危機管理の現状と課題」の「2000年の東海豪雨とその災害」そして「有珠山2000年噴火と火山防災」について感じたことを述べさせていただきますと思います。

まず、河田先生の記事についてですが、内容については読者がちょうど思っていることにしっかりとお答えになさっている質疑応答が、とても新鮮で分かりやすく読めるという感想を持ちました。ただ個人的にハザードマップを実際見てみたく、できれば今地域で実際使用されているものを掲載して頂きたかったとも思いました。

次に、岡田先生の記事についてですが、今回の学会誌のなかで一番おもしろく興味をそそられる内容であったと感じました。特に、本文中の「専門知識を危機管理のなかでどう使うかという全体の仕組みを考えていくことが極めて重要となる。」という文章には基本的なことのようではありますが、とても心に響きました。また、イタリアの火山の話を用いていることも私自身のようなまだまだ未熟者にとっては、大変興味を持つことができる部分であったと思います。そして本文中の図表については、非常に見やすく本文をうまく説明しているようにも思いました。

最後になりましたが、私のような者が偉大な先生方に意見するのは申し訳ない限りですが、少しでも防災そして減災に対する技術の発展を望んでいます。

「2000年東海豪雨とその災害を読んで」

北原 糸子

東海豪雨による大洪水が起きた歴史的必然性について、明解な解説ある。この水害に関連して、人々は自分の住んでいる地域の災害にいかに関心が高いかを例証する事例をあげておく。

筆者は、木下直之氏（東京大学文学部社会資源学学科助教授）とともに、2001年9月15日から24日まで、中日新聞社主催のもとに名古屋市の松坂屋美術「ニュース事始め」と題して、災害かわら版を中心とする展示を行った。江戸時代の平な城下町名古屋には、多様な趣味を追求する藩士が多くいた。その中の一人、高力猿猴庵は名古屋周辺のあらゆる社会事象を細密画にして残しており、新川開削と洗堰が作られるきっかけとなった天明4年（1784）大洪水の様子や、琵琶島での名古屋藩のお救い小屋などを丹念に描く冊子を展示した。2001年の展示では、被災後一年を経たものの、この災害に対する人々の関心が高く、このコーナーは黒山の人ばかりであったことを今でも思い出す（参考文献「ニュース事始め 人は何を知りたがるのか」中日新聞社、2001）。

「2000年東海豪雨とその災害」を読んで

富士通 荒川 修一

年間降水量の3分の1以上がたった2日間で降った「東海豪雨」について、検証から分かった知見が総合的に書かれており、興味深く読んだ。

「行政は災害が起こらなくすることに集中的な投資をしてきたが、これからは起こることも前提して、被害をいかに少なくするかにも力を注ぐ必要がある」と述べられており、つまり今後は、「減災」の考え方が大切になってきていると読み取った。

確かに「河川堤防の増強」といったハード対策だけには限界がある。

興味を引かれたのは、「避難勧告が出たにもかかわらず、避難した人は10%程度」という点、また、「住民が参加していないハザードマップ作成

は、結局、住民には使われない傾向にある」という点。

住民は、災害被災者となりうるので、今後は、自分たちの命は自分たちで守る、といった自己責任・自己防衛の観点から、積極的に「減災」活動に関わっていく必要性を感じた。

つまり、これからは、行政オンリーの防災ではなく、行政と住民との「減災」に向けた役割分担の時代へ移る必要性があり、両者の協力なくしては、本当の意味での「減災」は困難であると感じた。